

東南アジア



1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、アセアン10カ国のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低い一方、先進4カ国（マレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン）は、9%～15%台となっている。ベトナムは20.9%となっているが、製造業の発展により、これらアセアン先進4カ国の状況に近づきつつある。先進4カ国にベトナムを加えた5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になる一方で、農村が失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。

また、これら5カ国では、米（コメ）などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の生産額が高くないという特徴も有している。上記以外の3カ国のGDPに占める農業の割合については、カンボジアが32.5%（2008年）、ラオスが32.8%、ミャンマーは38.2%となっている。政情不安が長引いたこれら3カ国では、ほかの産業の発展が遅れているため相対的に農業の比重が高いが、GDPに占める農業の割合が、程度の差はあるものの低下傾向で推移しており、政情の安定化や経済の発展に伴って農業の比重が低下してきている。

マレーシアは、油ヤシ、ゴムなど永年性作物の栽培が多く、油ヤシの小草などを利用した畜産物の生産拡大の可能性はあるものの、将来的に食用作物栽培が増え、飼料資源が拡大するとは考えにくい。一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの食用作物が中心となっている。アセアン諸国中、ベトナム、タイ、ミャンマーは米の輸出国である。

畜産物の生産量は、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、国ごとに大きな差がある。

インドは、GDPに占める農業の割合は17.1%ではあるが、非都市人口が人口の70.8%、農業労働力人口が全労働力人口の約56.1%（2005年度）を占め、農業が国民生活上重要な産業となっている。

（データは断りのない限り2009年の数字）

表1 アセアン諸国・インドの主要穀物および畜産物生産量

(単位:千トン)

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2005	2,314	75	26	200	860	453	46
	2006	2,187	80	27	217	922	464	46
	2007	2,375	32	27	200	931	488	48
	2008	2,353	33	26	195	935	517	49
	2009	2,510	35	27	199	952	554	52
タイ	2005	30,292	4,216	311	669	950	779	888
	2006	29,642	3,986	291	865	962	821	826
	2007	32,099	4,150	265	915	986	869	729
	2008	31,651	4,518	300	864	1,019	882	786
	2009	31,463	4,884	274	756	1,075	970	847
インドネシア	2005	54,151	12,837	397	550	1,126	1,052	850
	2006	54,455	11,900	440	589	1,260	1,204	944
	2007	57,157	13,620	381	597	1,296	1,382	924
	2008	60,251	16,659	432	637	1,350	1,324	1,023
	2009	64,399	17,966	443	637	1,409	1,306	1,278
フィリピン	2005	14,603	5,253	250	1,415	650	561	13
	2006	15,327	6,082	252	1,565	658	641	13
	2007	16,240	6,737	288	1,617	662	593	13
	2008	16,816	6,928	279	1,606	741	622	14
	2009	16,266	7,034	284	1,710	752	629	14
ベトナム	2005	35,833	3,787	245	2,288	322	188	230
	2006	35,850	3,855	263	2,505	344	199	255
	2007	35,943	4,303	316	2,663	359	223	267
	2008	38,725	4,531	333	2,783	448	247	294
	2009	38,896	4,382	363	2,909	518	309	311
ラオス	2005	2,568	373	41	39	15	13	6
	2006	2,664	404	41	43	16	14	7
	2007	2,710	621	42	46	16	14	7
	2008	2,927	947	45	54	17	15	8
	2009	3,145	849	47	65	17	15	8
カンボジア	2005	5,986	248	67	135	17	17	22
	2006	6,264	377	70	139	17	20	23
	2007	6,727	523	71	120	18	23	23
	2008	7,175	612	73	110	19	23	24
	2009	7,586	924	74	105	19	22	24
ミャンマー	2005	27,683	904	129	328	561	201	989
	2006	30,924	1,016	147	370	650	225	1,094
	2007	31,451	1,128	159	411	726	247	1,215
	2008	32,573	1,185	171	463	798	282	1,309
	2009	32,682	1,226	183	450	800	287	1,355
インド	2005	137,690	14,710	2,274	473	550	2,579	95,619
	2006	139,137	15,097	2,282	474	582	2,708	99,348
	2007	144,570	18,955	2,291	476	617	2,944	103,280
	2008	148,770	19,730	2,304	479	649	3,060	109,000
	2009	133,700	16,680	2,313	481	680	3,200	112,114

資料: FAOSTAT

注1: 牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2: トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

2 東南アジア諸国畜産の動向

(1) 酪農・乳業

東南アジア諸国では、一般に牛乳・乳製品は、伝統的食文化としての位置付けが低く、また、気候条件が酪農にあまり適していないことや良質な飼料を得にくいことなどもあり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなかった。従来から、乳製品の主体は全粉乳などの粉乳類が、缶入り加糖れん乳であったが、冷蔵施設の普及や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳製品の需要も高まりつつある。

東南アジアでは、各国とも牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、生乳生産、工場インフラ、地理的条件などを総合的に考慮すると、将来的には、輸入乳製品からの還元乳の製造を含め、タイやベトナムはインドシナ半島諸国の牛乳・乳製品供給基地になりうると考えられる。また、2億を超える人口を擁し、ジャワ島を中心に近年経済発展を遂げているインドネシアにおける需要の伸びも期待されている。

東南アジアでは、乳脂肪の一部または全部を価格の安いパーム油などの植物性油脂で置き換えた、国際規格上は乳製品表示ができない擬似乳製品が普及しており、これに加えて、各国統計上の取り扱いもあいまいであることから、乳製品の需給動向の正確な把握は困難なものとなっている。

① 生乳生産動向

2009年の乳用牛の飼養頭数は、インドネシア、フィリピン、タイ、マレーシアでともに増加した。

インドネシアの乳用牛飼養頭数はタイに次ぐ規模であり、2009年は前年比4%増の47万5千頭となっている。同国における乳用牛は、ほとんどがジャカルタなど大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。同国では、政府が乳用牛増頭計画を掲げ、豪州からの繁殖牛の輸入も行われているものの、遺伝的能力の高い繁殖牛がまだ十分ではなく、零細な経営が多くを占めている。同年の生乳生産量は、同28%増の約82万7千トンとなっている。

マレーシアの乳用牛は大半が半島部で飼養されており、乳用牛飼養頭数(半島部)は前年比12%増の約3万2千頭となっている。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。また、同国の乳用牛はホルスタインとの交雑種が過半を占め、他はインド原産種となっている。同年の生乳生産量は、同10%増の6万4千トンとなっている。飼養頭数の変化はないものの、生産量は増加している。これは、能力が低いインド原産種の割合が減少しているためと考えられる。同国は歴史的に天然ゴムや油ヤシのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤の不足から政府の振興策は停滞している。

フィリピンの乳用牛飼養頭数は増加傾向で推移し、前年比9%増の約1万5千頭となった。同国では、このほか乳用水牛が約1万3千頭飼養されている。生乳生産量は、同3%増の1万4千トンで、このうち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。同国の生乳換算による自給率は1%程度となっており、消費量のほぼ全量が輸入品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイの乳用牛飼養頭数は前年比3%増の約48万頭4千頭であった。1999年以降2005年まで、飼養頭数は増加傾向で推移していたが、2006年は原油高などによる酪農家戸数の減少に伴ってかなり大きく減少し、その後回復基調にある。同年の生乳生産量は同7%増の84万トン

で、このうちの約9割は飲用乳に加工され、残りはヨーグルトなどに加工されている。政府は2001年から、学校供給用牛乳に国産生乳の100%使用を義務付けるなどの酪農振興施策を実施している。

表2 乳用牛の飼養頭数と生乳生産動向(2009年)

(単位:千頭、千トン、%)

国名	飼養頭数	前年比	生乳生産量	前年比
インドネシア	475.0	104	827	128
マレーシア	32.0	112	64	110
フィリピン	15.1	109	14	103
タイ	483.9	103	840	107

資料:各国政府統計

注1:マレーシアの飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

2:マレーシアの生乳生産量は、1リットル=1.03kgで重量換算。

3:フィリピンの生乳生産量は、水牛およびヤギ由来の乳を含む。

4:タイの生乳生産量は工場における生乳処理量。

②牛乳・乳製品の需給動向

生乳換算で見た場合、牛乳・乳製品の輸入量が国内消費量に占める割合は、東南アジア諸国では一般的に高く、半分以上を占めている。東南アジアにおける輸入乳製品の中心となるのは粉乳であり、そのまま小分けして販売されるほか、LL牛乳や缶入り加糖れん乳なども、全粉乳や脱脂粉乳から還元製造されるものが多い。

インドネシアにおける1人1年当たりの牛乳・乳製品の消費量は、前年比28.6%増の8.9キログラムで、消費量は少ないが、人口増加および経済発展に伴い需要が増加しつつある。

マレーシアにおける1人1年当たり牛乳・乳製品の消費量は、45.7キログラムで東南アジア最大となっている。また、地域別では半島部における消費量が多く、同56.68キログラムとなっている。同国は、牛乳・乳製品の輸出量

(2008年)が約6億6千万リットルとなっており国内生産量の約10倍となっているが、ほとんどが調製品および加工食品に含まれる乳成分である。

フィリピンにおける1人1年当たり牛乳・乳製品の消費量は、前年比18%増の17.4キログラムとなった。同国の生乳換算による自給率はわずか1%程度で、消費量のほぼ全量がNZ、米国、豪州からの輸入品および輸入品を原料とした加工品となっており、フレッシュ牛乳の飲用習慣は希薄とされている。

タイにおける1人1年当たり牛乳・乳製品の消費量は、前年比7%減の19.6キログラム、このうち乳製品が同8%増の14.7キログラムとなっており、学乳制度の導入などにより増加傾向で推移している。なお、牛乳・乳製品の輸出量は約66万トンとなっている。これは、豪州などから脱脂粉乳などの原料を輸入し、還元乳やれん乳などへ再加工の上、周辺国などへ輸出しているものである。

表3 牛乳・乳製品需給(2009年)

(単位:生乳換算、千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人1年当 たり消費量
インドネシア	827	2,957	3,282	502	8.9
マレーシア	64	1,506	1,253	656	45.7
フィリピン	14	1,790	1,604	200	17.4
タイ	840	753	1,247	345	19.6(14.7)

資料:各国政府統計

注1:インドネシアおよびタイの消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注2:フィリピンは水牛およびヤギ由来の乳を含む。

注3:タイの()は乳製品。

注4:マレーシアの輸出入量は2008年のデータ。輸出量にはサラワク州を含まず。

(2) 肉牛・牛肉産業

東南アジア諸国では、2003年から2004年にかけて鳥インフルエンザ(AI)の発生が確認された。このため、鶏肉需要の一部はほかの食肉へ代替されたとみられる。ただし、牛肉需要についてみると、1人1年当たり消費量は横ばいないし微減で推移している。東南アジア諸国では、牛肉消費については、各国における食習慣や経済状況の影響が大きいものと考えられる。

① 肉牛の生産動向

FAOによると、2009年の牛(肉用牛・乳用牛を含む)の飼養頭数は、東南アジア諸国の中ではミャンマーが最も多く、次いでインドネシア、ベトナムの順になっている。先進4カ国の肉牛の飼養頭数では、インドネシアが最大で、タイ、フィリピン、マレーシアの順になっている。

インドネシアの肉牛飼養頭数は、1997年に過去最高である1194万頭を記録して以降、総じて漸減傾向で推移している。ここ数年は1000~1100万頭台で推移していたが、2009年は前年比4%増の1276万頭となった。地域別には、首都ジャカルタのあるジャワ島が全体の約4割を占

めている。また、同国では豪州などから肥育素牛を輸入して3カ月程度

肥育した後、と畜に供するいわゆるフィードロット産業が盛んである。一方、水牛の飼養頭数は減少傾向が続いていたが、この間、水牛肉生産量(生体重換算)は4万トン台で大きな変化がないことから、水牛の飼養頭数の減少は、農作業の機械化による役用の減少が主な要因と考えられる。なお、2009年の水牛飼養頭数は、同0.1%増の193万3千頭となっている。

マレーシアにおける肉牛飼養頭数は、頭数が把握できる半島部においては、前年比0.4%増の75万4千頭となった。地域別には、ボルネオ島を除く半島部の総飼養頭数に占める割合は、肉牛、乳牛を合わせた牛で9割を超えるのに対して、水牛は6割となっている。水牛は、ボルネオ島の飼養比率が高くなっており、主に役用に供される機会が多いためと考えられる。

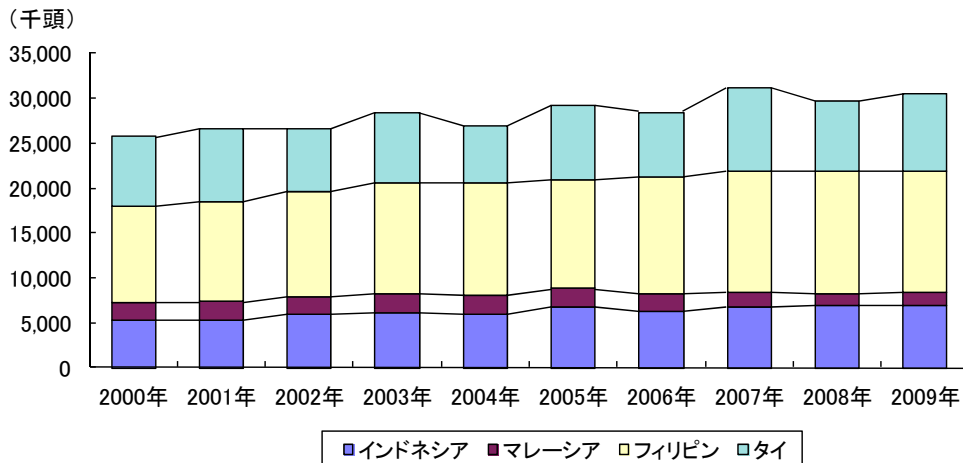
フィリピンの肉牛飼養頭数は前年比1%増の258万6千頭、水牛飼養頭数は同1%減の332万1千頭となっている。豪州などから肥育素牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、牛・水牛ともに飼養頭数が20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。このた

め、同国政府は農村部における零細経営の就労機会、収入の確保などを目的とし、新技術の普及促進、専門家の育成などの畜産振興策を打ち出している。同国の肉牛の飼養頭数は水牛を下回っているが、政府による振興政策などもあり、その飼養頭数は東南アジアで最大である。

タイの肉牛飼養頭数は、96年以降減少していたが、政府の肉牛振興政策などにより2001年からは微増傾向で推移した。2009年は前年比6%減の859万5千頭となった。水牛の飼養頭数は同2%増の138万9千頭となり、水牛肉を合わせた牛肉生産量は同6%増の16万7千ト

ンとなった。先進4カ国のうち、タイだけは豪州などから生体牛を輸入して肥育を行うフィードロット経営が少ないことが特徴である。同国では、ミャンマー、カンボジア、ラオス、中国などの周辺国から生体牛輸入が増加しており、このうちミャンマーからの輸入が大半を占めている。これらはタイ国内で肥育後、肉用にと畜されるか、または、マレーシアへ生体輸出される。水牛については、同国でも役畜として供されてきたが、工業化の進展に伴う農業の機械化が進んでいるものの、2009年の飼養頭数は前年を上回った。

図1 牛・水牛の飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表4 牛の飼養頭数と牛肉生産量(2009年)

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	
	肉牛	水牛	前年比	(%)
インドネシア	12,760	1,933	444	103
マレーシア	754	75	42	110
フィリピン	2,586	3,321	288	101
タイ	8,595	1,389	167	106

資料：各国政府統計

注1：インドネシアの生産量は生体重換算。

2：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

②牛肉の需給動向

インドネシアにおける1人1年当たり牛肉および水牛肉の消費量は、牛肉、水牛肉合わせて前年から0.5キログラム増の1.3キログラムとなった。同国における牛肉消費量は、ジャカルタなど一部地域に集中しており、また、食肉全体の消費についても民族・宗教によって慣習が異なることなどから消費動向における地域差が大きいとされている。

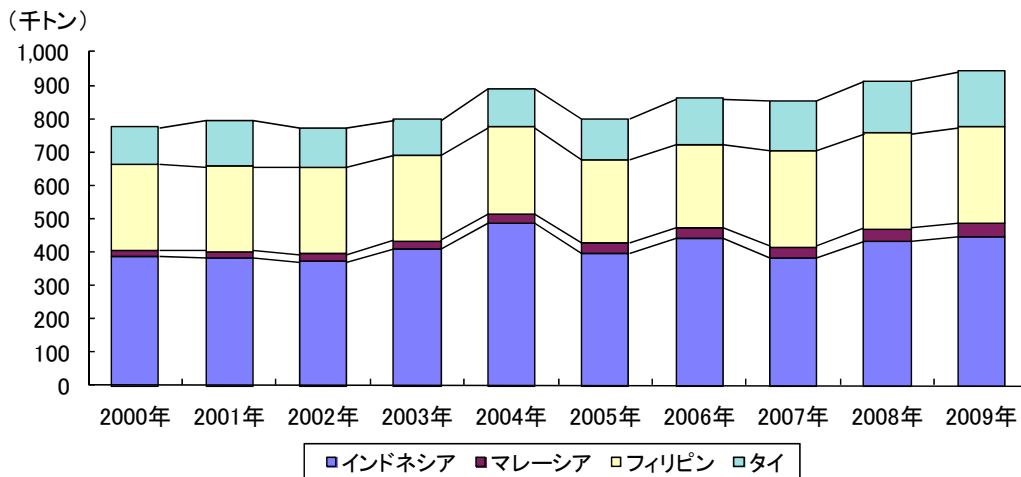
マレーシアでは、牛肉消費量に占める輸入品の割合が高いのが特徴であり、消費量に占める輸入品の割合は約8割と先進4カ国中最大となっている。1人1年当たり牛肉消費量についても地域差が大きく、半島部が6.4キログラムと東南アジア諸国の中でも突出しているが、ボルネ

オ島のサバ州では2.3キログラム、サラワク州で2.5キログラムとなっている。

フィリピンにおける牛肉自給率は約7割で輸入の割合が約3割を占めている。同国の牛肉輸入量は、先進4カ国のうちマレーシアと同水準となっており、ブラジル、インド、豪州などからの輸入量が多い。1人1年当たり牛肉および水牛肉の消費量は、牛肉が2.3キログラム、水牛肉が1.6キログラムの合計3.9キログラムとなり前年並みの水準であった。

タイにおける1人1年当たり牛肉および水牛肉の消費量は、牛肉が2.42キログラム、水牛肉が0.36キログラムの合計2.78キログラムとなり、前年比7%増となった。牛肉の輸入量は7千トンとなっており消費量に占める割合は少なく、輸入先は大部分が豪州とNZとなっている。

図2 牛肉・水牛肉の生産量の推移(2009年)



資料:各国政府統計

表5 牛肉の需給動向

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人1年当 たり消費量
インドネシア	200	0	200	1	0.2
マレーシア	206	-	213	-	7.62(*19.06)
フィリピン	1,629	87	1,716	0	18.4
タイ	500	14	511	3	8.0

資料：各国政府統計

注1：水牛を含む。

2：インドネシアの生産量は生体重換算。

3：インドネシアおよびタイの国内消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

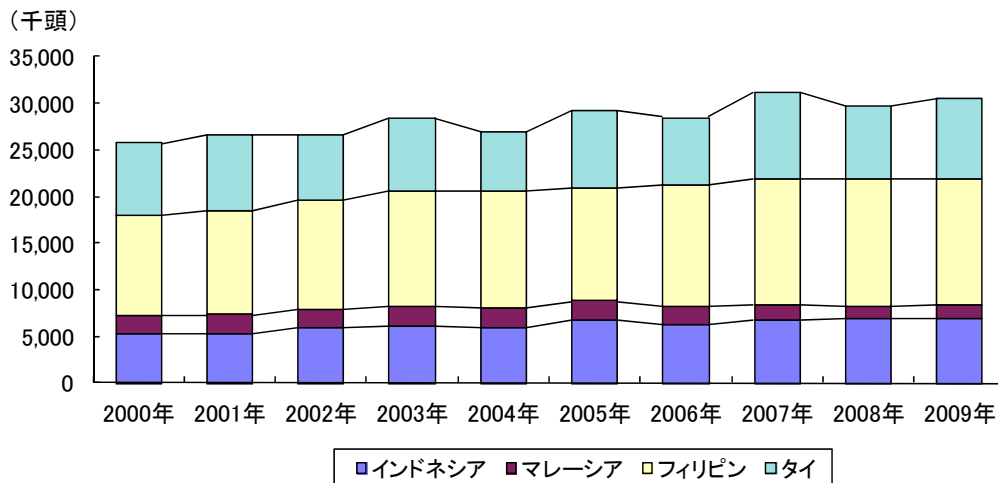
4：マレーシアの輸出入量は2008年のデータ。輸出量にはサラワク州を含まず。

(3) 養豚・豚肉産業

東南アジア諸国では、インドネシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多い。このため、国によって食肉における豚肉の重要度には大

きな格差があり、国の政策上の位置付けもさまざまである。しかし、イスラム教徒の多い国においても、中国系住民などの豚肉需要をまったく無視することはできず、種々の規制は設けながらも養豚を容認している。

図3 豚の飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表6 豚の飼養頭数と豚肉生産量(2009年)

国名	飼養頭数	生産量 (千頭、千トン、%)	
			前年比
インドネシア	6,975	200	95
マレーシア	1,831	206	106
フィリピン	13,596	1,629	101
タイ	8,538	500	99

資料：各国政府統計

① 豚の生産動向

FAOによると、東南アジアで豚の飼養頭数が最も多いのはベトナムで、2009年は2762万8千頭と、フィリピンの約2倍の飼養規模となっている。同国では、畜産振興計画を策定し、豚などの増頭に取り組んでいる。しかし、飼料の約6割を輸入に依存しているほか、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS)などが継続して発生していることもあり、飼料の増産のほか家畜衛生対策の強化も必要となっている。

インドネシアの豚飼養頭数は2001年以降おおむね増加傾向で推移している。2006年はアフリカ豚コレラが発生した影響もあり、621万8千頭と落ち込んだが、2007年以降増加傾向で推移し、2009年は前年比2%増の697万1千頭となった。

マレーシアの豚飼養頭数は、全体の約8割を占める半島部において、ウイルス性脳炎が1998年から1999年にかけて発生したため、大量の摘発のとう汰や飼養頭数の損失による廃業などの影響により、1999年の飼養頭数は240万頭台から130万頭台まで減少した。1999年以降は増加傾向で推移したが、2007年に家畜排せつ物による水質汚染や悪臭などが問題化したことから、政府は5万頭の早期と畜を行った。ボルネオ島部を加えたマレーシ

ア全体の2009年の飼養頭数は、前年比1.9%減の183万1千頭となった。

フィリピンは宗教的な制約が少ないこともあり、東南アジアではベトナムに次いで飼養頭数が多く、94年以降、増加傾向で推移してきたが、2009年は同1%減の1359万6千頭にとどまった。

タイは、ブロイラーに次ぐ輸出産業として養豚を推進しており、1997年には飼養頭数が1014万頭となりフィリピンを抜いた。しかし、1998年以降は政策意図とは逆に、飼養頭数が増減を繰り返す状態が続き、2007年は930万頭と大幅に増加したが、2008年には前年比17%減の774万頭、2009年は同10.3%増の853万8千頭となった。

② 豚肉の需給動向

インドネシアの豚肉生産量は、前年比5%減の20万トン、フィリピンは同1.4%増の162万9千トン、タイは同1%減の50万トンとなった。

インドネシアの豚肉消費量は、同5%減の20万トン、フィリピンは同2%増の171万6千トン、タイは国内豚肉価格の高騰により同25.0%減の51万1千トンとなった。

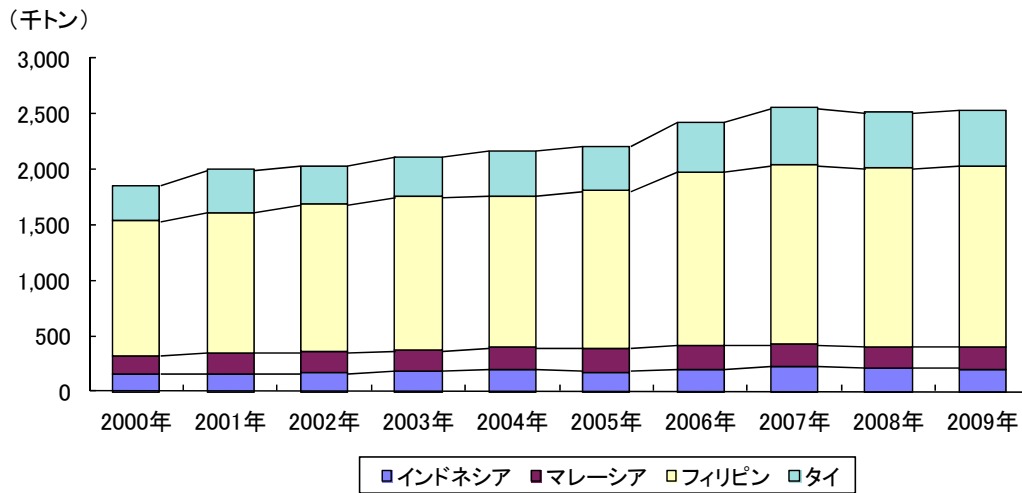
東南アジア諸国における豚肉の消費動向は宗教の影響を強く受けており、1人1年当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアが0.2キログ

ラムと1キログラムにも満たないのに対し、タイで8.0キログラム、また、食肉に関する宗教的制約の少ないフィリピンでは、18.4キログラムと国により差が大きい。フィリピンについては増加傾向で推移してきたが、2009年は豚肉価格の高騰により前年比5%減となった。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉食を好む中国系住民(非ムス

リム)などが4割程度占めていることから、1人1年当たり豚肉消費量は7.6キログラムとタイと同水準となっている。このうち、非ムスリムの1人1年当たり豚肉消費量は19.06キログラムとなり、ムスリム、非ムスリムあわせた同国全体の鶏肉消費量を上回る水準となっている。

図4 豚肉の生産量の推移(2009年)



資料:各国政府統計

表7 豚肉の需給の推移(2009年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人1年当たり消費量
インドネシア	200	0	200	1	0.2
マレーシア	206	4	213	1	7.62(*19.06)
フィリピン	1,629	87	1,716	0	18.4
タイ	500	14	511	3	8.0

資料:各国政府統計

注1:インドネシアおよびタイの国内消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2:マレーシアの*()内は非ムスリム。

3:マレーシアの輸出量にはサラワク州を含まず。

(4) 養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

東南アジアでは、ブロイラーの飼養が盛んであるが、在来鶏や採卵鶏、アヒルなどの家きんの飼養も盛んに行われている。家きんの飼養羽数は、インドネシアが最も多く、次いでタイ、マレーシアの順となっている。インドネシアの鶏飼養羽数は前年比3%増の約13億8千7百万羽で、このうちブロイラーの飼養割合は約74%、在来鶏は約18%、採卵鶏が8%となっている。

2009年の飼養羽数は、採卵鶏の大幅な減少があるものの、ブロイラーの増加により前年を上回った。タイの鶏飼養羽数は前年比19.6%増の約2億8千2百万羽で、ブロイラーの飼養割合が約62%、在来鶏が約22%、採卵鶏が16%である。特にブロイラーの羽数飼養割合が高い。フィリピンにおいては、鶏飼養羽数約1億5千8百万羽のうち約50%を在来鶏が占めており、ブロイラーの飼養割合は約36%と、在来鶏の割合が大きくなっているが、年々ブロイラーの飼養割合は増加している。

インドネシアのブロイラー飼養羽数は前年比14%増の10億3千万羽、生産量は同8%増の120万2千トンとなった。

同国のブロイラー飼養羽数は、2003年に同6%増の約9億2千万羽となり、その後は鳥インフルエンザ発生の影響を受け大幅に減少したが、徐々に回復し、東南アジア地域では最多となる。採卵鶏の飼養羽数は同43.7%減

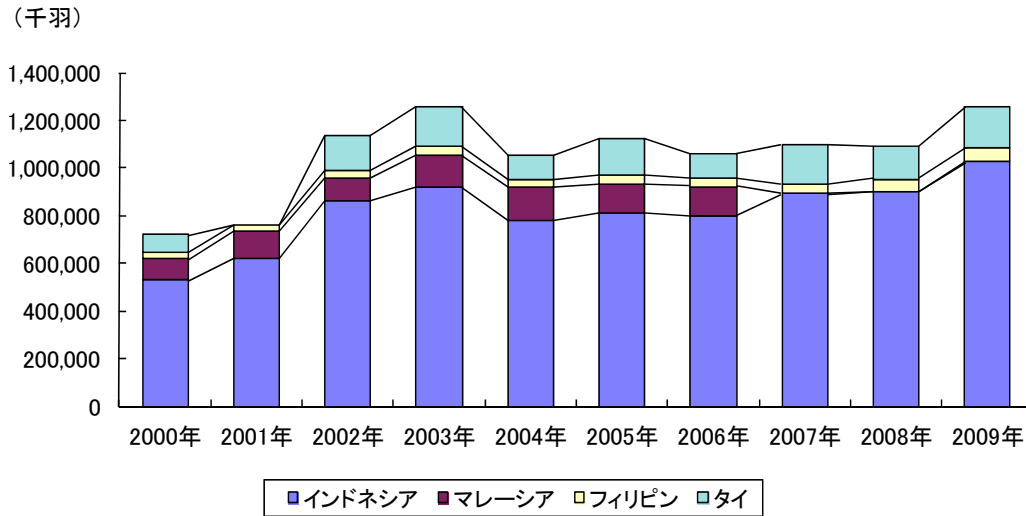
の約1億1千万羽、鶏卵の生産は同5%減の91万トンとなった。鳥インフルエンザの発生による影響はあるものの、同国における鶏卵・鶏肉は安価なタンパク源としての位置付けは変わっていない。

マレーシアにおける2006年のブロイラー飼養羽数は、前年比3%増の約1億2千5百万羽であり、このうち半島部では約8割の約1億4百万羽が飼養されている。採卵鶏の飼養羽数は前年同の約3千6百万羽となり、ブロイラーと同様に半島部で約9割の約3千2百万羽が飼養されている。2009年のブロイラーの生産量は同8%増の120万2千トン、鶏卵の生産量は同6%増の55万6千トンであった。

フィリピンのブロイラー飼養羽数は前年比9%増の約5千7百万羽、採卵鶏の飼養羽数は前年同の約2千5百万羽となった。生産量については、ブロイラーが同5%増の76万6千トン、鶏卵が同5%増の36万8千トンとなった。

タイのブロイラーおよび採卵鶏の飼養羽数は、鳥インフルエンザの発生した2004年以降大きな増減を繰り返している。ブロイラーについては、2007年が前年比70%増の約1億7千万羽、2008年が同19%減の1億3千8百万羽、2009年が同26.3%増の1億7千4百万羽となった。採卵鶏については、2007年が同67%増の約4千9百万羽、2008年が同17%減の4千1百万羽、2009年が同13%増の4千6百万羽となった。また、2009年の生産量は、ブロイラーが同3%減の110万6千トン、鶏卵が同5%増の57万4千トンとなった。

図5 ブロイラーの飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注：データの制約のため、2001年のタイ、2007～2009年のマレーシアのデータが欠損している

表8 鶏の飼養羽数と鶏卵・肉の生産量(2009年)

国名	飼養羽数		生産量 (千羽、千トン、%)			
	採卵鶏	ブロイラー	鶏卵	前年比	ブロイラー肉	前年比
インドネシア	111,418	1,026,379	910	95	1,102	108
マレーシア	na	na	556	106	1,202	103
フィリピン	25,180	56,940	368	105	766	105
タイ	46,122	173,936	574	105	1,106	97

資料：各国政府統計

注1：鶏卵は1個58gで換算。

2：フィリピンは地鶏を含む。

②鶏肉の需給動向

鶏肉消費に関しては宗教上の制約が少なく、東南アジアでは最も身近で重要な食肉となっている。

インドネシアにおけるブロイラーの飼養羽数はタイの約6倍であるにもかかわらず、鶏肉の生産量はタイと同等という状況となっている。この要因としては、ほかの東南アジア諸国同様ブロイラーを食鳥処理場で処理した場合には少額ながら課税や手数料徴収の対象になることやワールドチェーンが未発達であることなどにより、食鳥処理場以外で処理したり生きたまま販売したりするケースが多

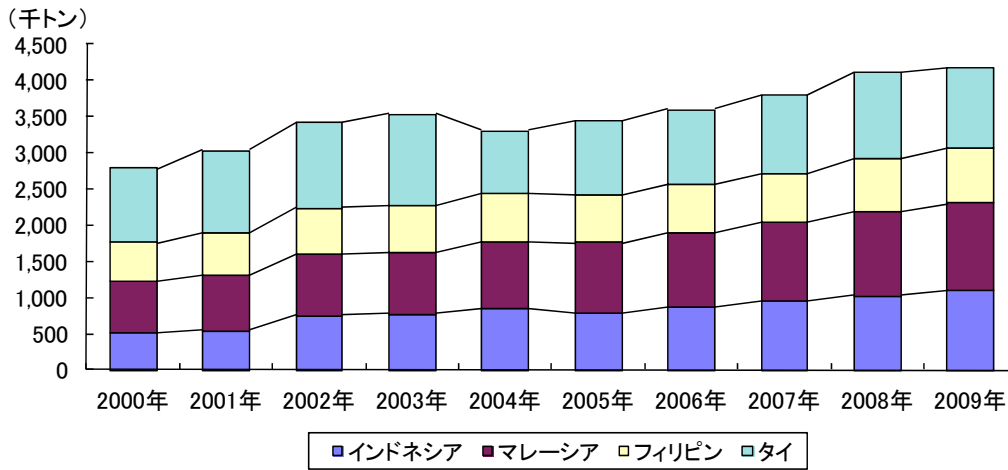
数を占めるため、かなりの生産量が統計で把握できないためと考えられる。食鳥処理場以外での処理が容易に行える鶏肉は、インテグレーターの市場占有度が高いタイを除き、統計上から需給動向を正確に把握することは困難である。

また、インドネシアとフィリピンは在来鶏の割合が高い。在来鶏の価格はブロイラーより高いものの、一般には在来鶏肉の方が好まれる傾向がある。このことも、需給動向を詳細に統計的に捉えることが困難である一因となっている。

タイでは、2004年1月以降、鶏肉の主要輸出先である日本およびEU各国が、鳥インフルエンザの発生を理由に相次いで同国からの家きんなどの輸入一時停止措置を実施した。その後、加熱処理された鶏肉調製品については、主要国に輸入再開を認められたものの、非加熱鶏肉の輸入停止措置は継続している。このため、同国の輸

出は非加熱鶏肉から加熱処理された鶏肉調製品へとシフトしており、冷凍鶏肉の輸出量は2003年の37万1千トンから2009年には2万5千トンと激減したのに対し、鶏肉調製品の輸出量については、2003年の12万8千トンから2009年には35万トンへ増加している。

図6 ブロイラーの生産量の推移



資料：各国政府統計

表9 ブロイラーの需給の推移(2009年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人1年当たり消費量
インドネシア	1,101.8	2.7	1,104.5	0.0	3.9
マレーシア	1,202.0	20.1	983.5	14.5	35.3
フィリピン	765.6	61.4	822.5	3.6	8.9
タイ	1,106.2	0.3	1,081.3	25.2	17.0

資料：各国政府統計

注1：インドネシアおよびタイの国内消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注2：マレーシアの輸出入量は2008年のデータ。輸出量にはサラワク州を含まず。

③鶏卵の需給動向

東南アジア諸国は鶏卵を粉卵や液卵に加工する施設がほとんどないため、市場動向に応じて価格が乱高下しやすい傾向がある。また、価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定システムが十分に機能していないため、頻繁に供給過剰の問題を抱えることとなる。2009年の1人1年当たり鶏卵消費量は、インドネシアが5.8キログラム、フィリピンが3.7キログラム、タイが8.2キログラム、マレーシアが17.4キログラムであった。

東南アジアでは、タイとマレーシアを除き、鶏卵の輸出入の実績はほとんど無い。タイの鶏卵輸出量は、鳥インフルエンザが発生した2004年は3千3百トンであったが、需給調整対策として輸出を奨励していることもあり、2005年以降増加傾向で推移し、2009年は同16.2%増の2万9千トンとなった。なお、マレーシアの2008年の鶏卵輸出量は、主要仕向け先であるシンガポールやインドネシアの需要増加により、同33%増の約8万1千トンであった。

表10 鶏卵の需給動向(2009年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)
					1人1年当たり消費量
インドネシア	909.5	1.3	910.8	0.0	5.8
マレーシア	556.0	0.0	485.0	81.4	17.4
フィリピン	368.5	1.4	340.4	0.0	3.7
タイ	574.3	0.0	553.5	28.5	8.2

資料：各国政府統計

注1：鶏卵は1個58gで換算。

2：インドネシアおよびタイの国内消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3：マレーシアの輸出入量は2008年のデータ。輸出量にはサラワク州を含まず。